

小学校体育「集団マット」の演技を構成する技の数

— 関心・意欲面への影響 —

滝沢 かほる^{*1}、加藤 雄志^{*2}

Teaching Group Tumbling at Elementary School

Kaoru TAKIZAWA, Yushi KATO

1 研究目的

集団マット¹⁾は、専門誌でもよく目にするようになってきたが、小学校高学年から中学校にかけて多く実践されている。低・中学年で行われないのは、集団マットには、学習者がある程度の問題解決の力を身に付けていることが必要とされるからであろう。個々の思いとグループとしての思いが交錯する学習場面の中で、学習者は仲間との何らかの関わり合いをもつ。しかし、問題解決や関わり合いを重視するあまり、運動の楽しさの経験不足や意欲が減退するのでは、効果的な教材であるとは言い難い。両者のバランスが肝要である。効果的な教材のセッティングは、指導者の責務である。

神家²⁾は、集団演技の構成要素として、「人数的構成要素」「時間的構成要素」「方向的構成要素」「体系的構成要素」を挙げている。ここで、これらの他にも集団マット運動の構成要素の一つとして、「構成する技数的要素」があると考えられる。しかし、技数についての実践研究は見あたらず、現場教員が各自の判断によって実施しているのが現状である。そこで、本研究では、構成する技数が児童の学習の取り組み方や関心・意欲にどのような影響を与えるかをアンケート調査により明らかにし、今後の学習指導の一助にすることを目的とした。

2 研究方法

(1) 調査方法

1) 学習への取り組み方

集団マットの授業終了後に、毎回、児童の自己評価による学習への取り組み方を5項目について調査し、比較・検討した。

2) 関心・意欲

集団マットの単元前後に、児童の関心・意欲を30項目について調査し、比較・検討した。

(2) 調査対象

1) 対象 新潟県内M町立M小学校 6学年児童 52名

A群(26名):演技を構成する技数3~4

B群(26名):演技を構成する技数10前後

2) 期間 2005年11月 2日~ 11月10日

3) 単元構成

単元構成は図1・2の通りであった。

第1時では、自分の今できる技を知るために試しの運動の時間を設定し、技カードをもとに実際に行い、自己診断をさせた。第2~5時では、グループで集団マットの構成を考え、練習し、発表する

*1新潟大学教育人間科学部

*2新潟大学大学院教育学研究科修士課程 五泉市立村松小学校

学習を行った。A群は技数を3～4、B群は10程度を課題とした。

本研究で対象とした授業では、新しい技への挑戦ではなく、今できる技を組み合わせ、集団で行う演技を構成し、練習した後、発表することを内容とした。

全5時間

1	2	3	4	5
<p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ビデオ教材でイメージをもつ。 <p>試しの運動</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分のできる技を調べる。 	<p>課題を知る</p> <p>「技の数が10個程度の集団マットをつくりましょう」</p> <p>グループの作品構成を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 打ち合わせ。 練習。 試し。 	<p>グループで作品をつくらう</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで発生した問題を解決しながら作品をつくる。 <ul style="list-style-type: none"> 短マットで練習 方形マットで合わせ。通し。 演技の再構成。 <ul style="list-style-type: none"> ビデオで自グループの演技を視聴し、完成度を見るとともに他グループの工夫点について考える。 	<p>グループで作品をつくらう</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで発生した問題を解決しながら作品をつくる。 <ul style="list-style-type: none"> 短マットで練習 方形マットで合わせ。通し。 演技の再構成。 <ul style="list-style-type: none"> ビデオで自グループの演技を視聴し、完成度を見るとともに他グループの工夫点について考える。 	<p>発表しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループ毎に作品を発表し、見合う。 作品を発表する。 学習を振り返る。

図1 A群（技数3～4）単元計画

全5時間

1	2	3	4	5
<p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ビデオ教材でイメージをもつ。 <p>試しの運動</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分のできる技を調べる。 	<p>課題を知る</p> <p>「技の数が3～4個の集団マットをつくりましょう」</p> <p>グループの作品構成を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 打ち合わせ。 練習。 試し。 	<p>グループで作品をつくらう</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで発生した問題を解決しながら作品をつくる。 <ul style="list-style-type: none"> 短マットで練習 方形マットで合わせ。通し。 演技の再構成。 <ul style="list-style-type: none"> ビデオで自グループの演技を視聴し、完成度を見るとともに他グループの工夫点について考える。 	<p>グループで作品をつくらう</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで発生した問題を解決しながら作品をつくる。 <ul style="list-style-type: none"> 短マットで練習 方形マットで合わせ。通し。 演技の再構成。 <ul style="list-style-type: none"> ビデオで自グループの演技を視聴し、完成度を見るとともに他グループの工夫点について考える。 	<p>発表しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループ毎に作品を発表し、見合う。 作品を発表する。 学習を振り返る。

図2 B群（技数10程度）単元計画

3 結果と考察

(1) 学習の取り組み方への自己評価

両群の第3・4・5時における学習への取り組み方の自己評価を調査した。(表1, 表2, 図3, 図4参照)

「楽しく運動できたか」「積極的に取り組めたか」「自分に合った課題だったか」「練習の仕方を工夫できたか」「仲間と教え合いや励まし合いができたか」の項目について調査した。「よくできた」「できた」「できなかった」の3段階尺度とし、それぞれ3点、2点、1点の得点を与えた。各群の平均値を比較した結果、次のことが明らかになった。

「楽しく運動できたか」の平均値は、第3時ではA群が2.74、B群が2.28と、A群の方が高い数値を示したが、第5時にはA群が2.80、B群が2.75とほぼ同程度の数値を示し、その差は0.05となった。第5時には発表会が行われたことから、技数ではなく、発表の楽しさが大きいと言える。

「積極的に取り組めたか」については、B群が第3時において比較的良かったものの、第5時には2.67を示し、A群を0.11上回った。B群の取り組みは、構成ができあがってから積極的になったといえる。

「自分に合った課題だったか」については、集団で組み合わせ技の練習や演技の再構成に取り組み始めた第3時において、A群が2.48、B群が2.24と、B群が比較的良かった。B群は技数が多いことから、演技の順番を正確に覚えることが初めに必要な学習活動となり、自分で課題を見つけるという主体的な取り組みにはならなかった。

「練習の仕方を工夫することができたか」については、第4・5時においてB群の方がA群より高かった。技数が多いために、B群の方が練習方法に工夫をこらしたと言える。

「仲間と教え合いや励まし合いができたか」については、第5時においてA群が2.41、B群が2.67であった。B群の方が高い値を示していることから、技数が多いので、教え合いや励まし合いがより多く必要だったことが分かる。

表1 第3, 4, 5時における学習への取り組み方の自己評価 A群(技数3~4)

	第3時	第4時	第5時
楽しく運動できたか	2.74	2.63	2.8
積極的に取り組めたか	2.44	2.48	2.56
自分にあった課題だったか	2.48	2.56	2.76
練習の仕方を工夫することができたか	2.26	2.7	2.64
仲間と教え合いや励まし合いができたか	2.26	2.26	2.41

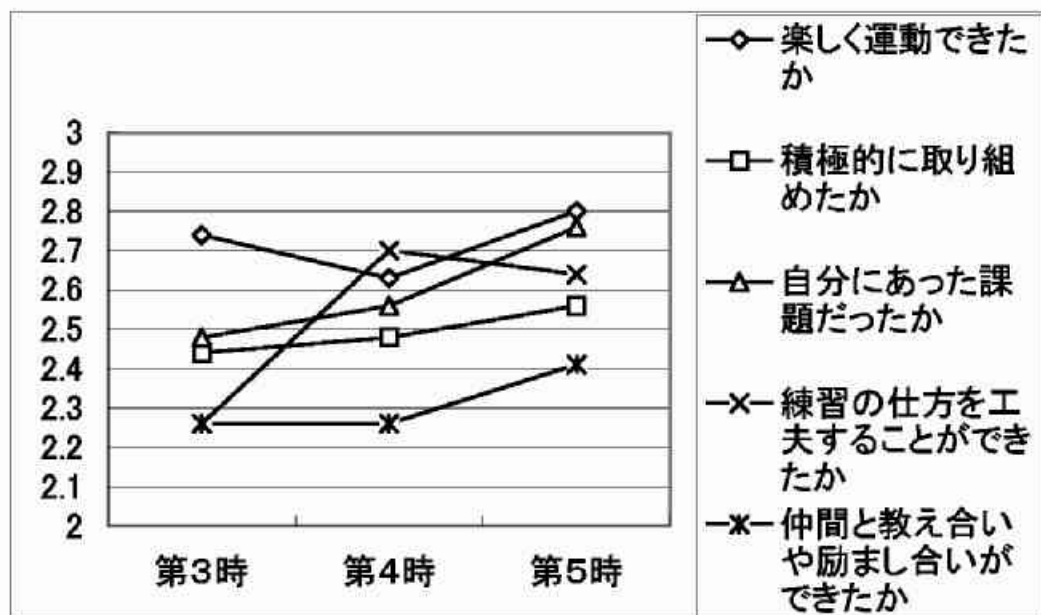


図3 A群(技3~4個)自己評価の変遷

表2 第3, 4, 5時における学習への取り組み方の自己評価 B群 (技数10程度)

	第3時	第4時	第5時
楽しく運動できたか	2.28	2.59	2.75
積極的に取り組めたか	2.28	2.5	2.67
自分にあった課題だったか	2.24	2.45	2.71
練習の仕方を工夫することができたか	2.24	2.59	2.79
仲間と教え合いや励まし合いができたか	2.48	2.5	2.67

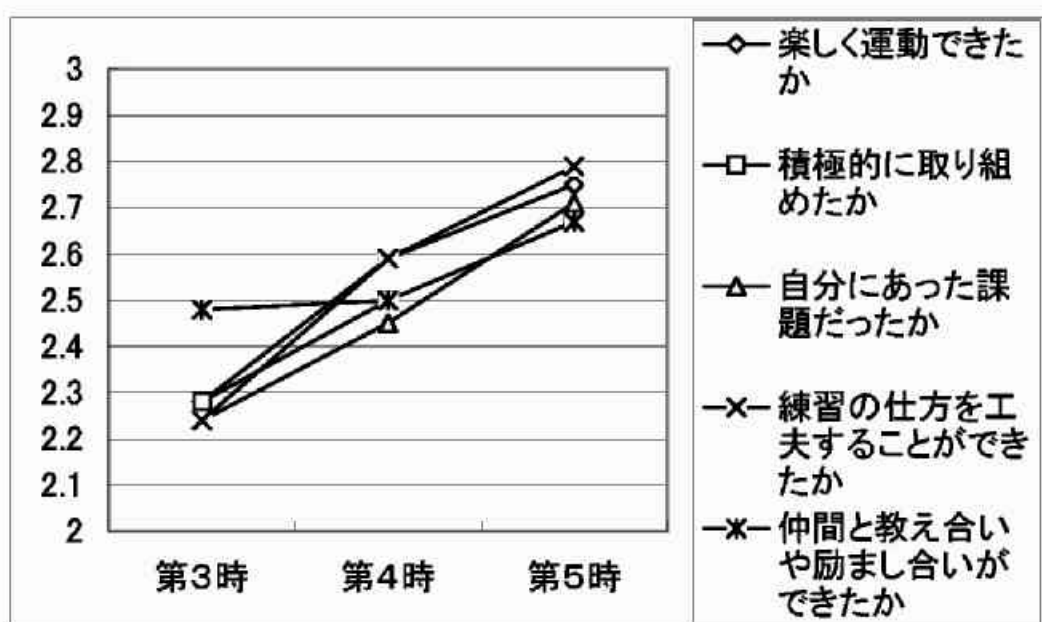


図4 B群 (技10個程度) 自己評価の変遷

(2) 児童による単元前後の意識調査

学習前と学習後に子どもたちの関心・意欲に関する表3の30項目について調査した。各項目について「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の5段階尺度で回答を求め、それぞれ5点、4点、3点、2点、1点の得点を与えた。平均値を群ごとに比較した結果、次のことが明らかとなった。

「グループで話し合い、計画や反省をしていくことが大切だ」についての平均値は、両群とも事後の方が有意に高かった。技数にかかわらず、集団マットにおいては仲間と試行錯誤しながら学習することができた。集団マットは、仲間との係わりが生まれる教材であることがわかった。

「先生に教えてもらいたい」についての平均値は、A群は事後の方が有意に高く、B群は3.35と、事後の方が低い値を示した。教師の見取りからは、A群は技の雄大さやさばきの美しさにまで関心をもって練習していたことがわかり、教師の指導のもと、熟練性を求める方向への発展の可能性が伺える。

「うまい人の動きを見たい」については、A群は、事前で4.65、事後で4.50と高い値を示した。B群は事前では4.27、事後では3.73と、有意に低くなった。

「技ができるように、練習の場を工夫することが大切だ」については、B群は事後が有意に高かった。A群は技数が少ないので手本となるより良い動きに関心をもち、B群は技数が多いので練習の場の工夫に関心をもちたことが分かる。

表3

単元前と単元後の平均値比較

	項 目	A 群 技数 3~4			B 群 技数 10程度		
		事前	事後	t値#	事前	事後	t値#
1	今できる技について、もっとうまくなりたい	4.81	4.77	.770	4.62	4.42	.134
2	今知っている技の他にどんな技があるのか知りたい	4.42	4.46	.770	3.85	4.04	.284
3	自分たちでいろいろな技に挑戦したい	4.35	4.46	.523	3.73	3.92	.409
4	技の大切なポイントを知りたい	4.58	4.50	.538	3.85	3.96	.574
5	ダイナミックな技ができるようになりたい	3.88	3.65	.265	3.88	3.96	.779
6	技が、うまくなるようになりたい	4.85	4.77	.425	4.46	4.58	.631
7	グループでの話し合い計画や反省が大切	4.35	4.73	.001**	3.08	4.23	.000***
8	練習して、自分ができる技の種類を増やしたい	4.58	4.54	.852	4.35	4.23	.559
9	技ができるように、練習の場所を工夫することが大切だ	4.04	4.35	.118	3.69	4.15	.037*
10	どのような練習方法があるのか知りたい	4.31	4.27	.788	3.65	3.81	.516
11	学習の中で、汗をかいたり思い切り動いたりしたい	4.23	4.31	.425	3.50	3.58	.678
12	教え合いながら学習したい	4.04	4.15	.502	3.50	3.73	.228
13	自分の技がどれだけ進歩したか知りたい	4.46	4.54	.490	3.69	3.69	1.000
14	気楽に楽しく運動したい	4.46	4.42	.713	4.15	4.42	.327
15	みんなでなかよく運動したい	4.35	4.54	.259	3.96	4.08	.559
16	友達のためになるように、自分の役割を果たしたい	3.88	4.46	.000***	3.50	3.85	.153
17	いい動きを見せて目立ちたい	2.31	2.62	.043*	2.77	3.15	.067
18	うまい人の動きを見たい	4.65	4.50	.461	4.27	3.73	.020*
19	練習では、できるようになるまでやりたい	4.19	4.27	.627	4.12	3.69	.061
20	うまくなったときにほめてもらいたい	.04	3.23	.170	3.23	3.23	1.000
21	資料や、人の動きを見て学習したい	3.73	3.81	.739	3.15	3.35	.259
22	むずかしい技を練習したい	3.73	3.96	.365	3.58	3.58	1.000
23	うまい人のまねをしたい	4.15	4.08	.603	3.62	3.54	.723
24	失敗したときに、笑わないでほしい	3.81	3.73	.783	3.62	4.00	.076
25	自分の動きを先生や友達に見てもらいたい	3.00	3.28	.200	2.85	3.23	.076
26	先生に教えてもらいたい	3.50	4.23	.001**	3.38	3.35	.802
27	できないときは他の技に移って練習したい	3.12	3.46	.153	3.46	3.23	.490
28	準備や後かたづけを協力してやるのが大切だ	4.77	4.88	.265	4.50	4.38	.523
29	一つの技より、いろいろな技を練習したい	4.38	4.46	.603	3.88	3.96	.753
30	マット運動が好きである	3.15	4.15	.000***	3.23	3.62	.076

* p < .05 ** p < .01 *** p < .001

4 結論

- (1) 技数を3～4とした集団マットには、次の教材としての特徴がある。
 - 単元の早い段階で楽しさを味わわせることができる。
 - 技能の上達がねえ、表現型の運動に発展させることができる。
 - より良い動きに関心を向けることができる。
- (2) 技数を10程度とした集団マットには、次の教材としての特徴がある。
 - 練習の仕方の工夫、教え合い・励まし合いを伴った学習活動ができる。
 - 組み合わせ技の遂行をめざした達成型の運動となる。
 - 練習の場の工夫に関心を向けることができる。
- (3) 集団マットには、教材として次の特徴がある。
 - 技の数にかかわらず、計画や反省など、仲間と共に学習を進めることができる。
 - グループの作品の発表会を学習活動に位置づけることで、個々の学習形態では発表を嫌う児童も意欲的となり、楽しさを味わわせることができる。

¹⁾ 本稿で言う集団マットとは、マット運動における集団で行う組み合わせ技の演技とする。

²⁾ 神家一成「集団演技のための用具や場の設定」学校体育2001. 11. p18

(平成18年2月28日受理)